

Title	ぷらっとシネマ 一種のヴェトナム戦争映画『グラン・トリノ』 (C・イーストウッド監督)
Author(s)	萩原, 弘子
Editor(s)	
Citation	働く女性の情報誌 いこ る. 2009, 20 (2009 夏号). p.23
Issue Date	2009
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15470">http://hdl.handle.net/10466/15470</a>
Rights	



## 一種のヴェトナム戦争映画 —

### 『グラン・トリノ』(C・イーストウッド監督)

フォード社の誇り高い自動車工だったコワルスキーは、長年連れ添った妻を亡くして、すべてを憂いながら寂寥とした日々をおくっている。計算高い息子たち、礼儀知らずの孫たち、青二才の司祭。アメリカ自動車産業の中心地デトロイトの繁栄はとうに昔話だ。コワルスキーの住む地区は荒廃が進み、東南アジアからの移民が流れこんでいる。妻との思い出がしみこんだ家で、犬だけを友として過ごす彼は、わけのわからない言葉と習慣をアメリカにもちこんで暮らす隣家のアジア人たちを、苦々しい思いで見ている。

コワルスキーにとって「グーク」(「汚物野郎」といった意味で、アジア人への蔑称)でしかなかった隣のモン人(the Hmongs と言っているのが、字幕では「モン族」と訳されている)の一家だが、或る事件をきっかけとして、若い姉弟と声を交わすようになり、やがて親交を深めていく。聡明でまじめな姉弟だが、モン人のチンピラたちは彼らを放っておかない。弟のタオを手下にしようとして盗みを命じ、思いどおりにならないと見ると、待ち伏せて暴行を加える。姉のスーを乱暴な言葉でからかい、ちょっかいを出そうとする。2人を護ろうと睨みをきかせる白人コワルスキーの存在は、チンピラたちを一層いらだたせる。ついには姉弟の家が襲撃され、スーは強姦される。隣人を「グーク」としか見なかったコワルスキーが、スーとタオの受けた仕打ちに怒り、復讐にのりだす。

感動作とする声が高いのは、人種偏見をもつ老人が心を開き、果てはアジア人姉弟のために命を賭して復讐に及ぶという「愛の物語」への評価だろう。しかし私が気になるのは、本作が語る「正義の物語」だ。問いたいことがいくつもある。

まず、本作で最も人々を感動させる「華の」結末、つまりコワルスキーがスーとタオの姉弟に救済をもたらす正義の実現を、銃によらず、目撃者証言に委ねるといふ結末はどうなのか。チンピラのアジト周辺に住むモン人たちが、殺されたコワルスキーの「非武装、無抵抗」を証言することで、チンピラたちは長期刑に処せられる。姉弟の安全を確保すべく、のちのちまでを予測して、死を承知で丸腰で臨んだコワルスキーは、アメリカの司法的公正さを信頼してそれに正義の実現を委ねたことになる。しかし、と私は思う。近所のモン人が、

同じモン人による犯行についてアメリカの警察に証言するということが、本当にあるならば、彼らはコワルスキー殺害の証言者となる以前に、同じモン人が被害者となったスーの強姦、一家への襲撃の証言者となっているはずだ。

また、コワルスキーが死をもって実現したのは、姉弟を護るといふ小さな正義だが、それはなんのためだろうか。そもそも、なぜモン人がアメリカにいるのか。なぜモン人青年が仕事にあぶれて街のチンピラとなるのか。それらの答えを探っていくと、本作が一種のヴェトナム戦争映画であることが見えてくる。

かつてヴェトナム北爆が本格化する前の1961年、米軍はラオス北部でモン人特殊部隊を組織した。多くのモン人が米軍の先兵として北ヴェトナム軍、パテト・ラオ軍(ラオス愛国戦線)と闘わされた。戦況が悪化して米軍が撤退するときは見捨てられ、北ヴェトナム軍による報復襲撃を受ける。モン人20万人が犠牲になったという。生き残っても帰る場所を失い、アメリカに渡った者が10数万人はいるとされる。大国の戦争に使われたために故郷に帰れなくなり、大国に渡った者たちと、そこで生まれ育った次世代の青年たちの人生を翻弄してきたのは、大国が責任をもつ大きな不正義である。本作に登場するモン人チンピラは、どんな歴史ももたず、ただ乱暴で、正義の感覚が欠落した憐れむ余地ないクズである。コワルスキーは姉弟との交流によって人種主義的な「グーク」観を改めたようだが、悪役の側は一貫して「グーク」であり、多くのアメリカ人観客は長年抱いてきた「グーク」観を確信するだけだろう。

いまだに正されない大きな不正義があるなか、老いた男がモン人姉弟のために小さな正義を実現する。小さな正義の美談によって、根深い不正義が糊塗される。しかもモン人はだれひとりとして自力では小さな正義も達成できないまま、美談は終わる。最後を飾るのは、コワルスキーが大切にしていた1972年型フォード車グラン・トリノを遺贈されたタオのドライブ・シーンだ。自力では正義を達成しえなかったモン人青年の運転で、輝く名車が走っていく。譲られたのは車だけ。正義の独占はまだ終わらない。

(アメリカ、オーストラリア、2008年、116分)